大熊猫の世界にとりっぷ！

深月織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大熊猫の世界にとりっぷ！

【Ｎコード】
Ｎ８２９１Ｏ

【作者名】
深月織

【あらすじ】
夕花さまから始まった【動物の世界にとりっぷ！】シリーズにインスパイアされてやっちまいました。
お気楽にお読み下さい。
ほのぼの……とは程遠い、危険物かもしれない。

（前）

拝啓、地球世界日本国の我が父上様、母上様。
突然、姿を消した親不孝をお許し下さい。
やむにやまれぬ事情によるものと、お二人ともご理解して下さると信じております。
たやすく連絡も出来ない場所におります故、こうして届くとも解らぬ脳内電波を飛ばしておりますが、大丈夫、瀬名は元気です。
ええ、元気ですとも。

こうなって改めて思いました。
人間、丈夫が一番だと。
幼稚園から大学、社会人になっても皆勤賞だった私。健康かつ丈夫に産んで下さった母上様には感謝の言葉もございません。
でなければ、一日目でとうに私は儚くなっていたでしょう。
ええ、ええ、私がこちらへ来て数週間。皆勤賞？　ナニソレオイシイノ？　なんてことになっているのは重々承知しております。
ああ無断欠勤。
あああ冬のボーナスが。雀の涙程度でも、温泉に一泊二日くらいは出来たのに……！
かえすがえすも口惜しい。
何故、私はあのときあの道を通ってしまったんでしょう……。
満月キレイ、なんて上を見上げながら歩いた、ホロ酔い気分の自分を罵ってやりたい。
通り慣れた道で階段を踏み外すなんて間抜けなことをした自分を、膝詰め談判して反省させたい。
起きたことは起きたこと、過去は変えられないと割り切るには、いささか現状があんまりだと思うのです。

……ごめんなさい、こんなことを言えば父上様も母上様もご心配なされますよね。
大丈夫、大丈夫です、瀬名は強い子。
たとえ竹林に覆われた山岳地帯に軟禁の憂き目に遭おうが、見かけはのんびりだらだらなイキモノに囲まれこちらまで怠惰な生き物になりそうであろうが、二匹のケダモノに絡まれようが、挫けずいつか帰れる日まで、頑張って生き抜いて見せます！

どうか父上母上様も、再び私と見（まみ）える日まで、御健勝であられて下さいませ。

娘　瀬名より

「ぎゃっっ！！」

竹藪に身を隠し、草を掻き分け先を急いでいた私は、パンプスの靴底が落葉を踏んで滑るのを感じて声を上げた。
なにしろ目の前はゴツゴツした石が頭を出している急斜面。
転ぶだけならまだしも、転がり落ちた結果、スプラッタは間違いない。
バランスを取るために振り回した腕で、咄嗟に天高く伸びたぶっとい竹にしがみついた。
反動でワサワサ揺れる頭の上の葉に、ヤバイと頭が警鐘を鳴らす。
ホッと一息ついている場合ではない。今ので居場所を気づかれる、

てか絶対気づかれた。――早く――、

「嫁ぇ！」

「いやあああああああっ！？」

聞き慣れてしまった声に背中を叩かれ飛び上がる。

視線を上方に向けると、白黒のもったりしたイキモノが、短い四肢を駆使し、ものすごいスピードでこちらへ向かってきていた。

普段はゴロゴロしてるだけのくせにどうしてこういうときは俊敏なのッ！

ザッシザッシと土塊を蹴る音に、私の心臓が動きを速める。

もうスプラッタも構うものか。転がり落ちれば手っ取り早く麓につくだろう。

いささかヤケクソ気味な思考になりつつ、しがみついていた竹から手を離し、私は再び逃走を開始した。

「嫁！　そんなひょろっこい手足で危ねえぞっ」

「嫁じゃないッ！　危ないのはアンタたちだ！」

言い返す暇があるなら逃げろ私。わかってるけど言い返さずにはいられないのよ！

どんどん縮まる距離に、焦りまくる私。当然ながら、足元なんて確認する余裕もなく。

「あうっ」

何かの根を踏んだ足首がグキン、と妙な音を立てた。

痛、と思う間もなく身体は宙に浮き――切り立った崖が下方に、流されたらただではすまなさそうな川が見えて――その浮遊感に、こちらへ来たときのことがまざまざと思い出される。

そう、あのときも確かこんな風に落ちて、一歩先に突然口を開けていた穴に投げ出されたのだ。
スローモーションで、空が遠くなって、携帯につけていたストラップが千切れ飛んで空に浮かんだのを、覚えてる。
これが走馬灯かー、と状況にそぐわない間抜けなコメントが頭を過った。
身投げ一直線な私は、ぎゅっと目を閉じて衝撃に備えた。

が。

ぼふん、と固柔らかいものが私を包み込む。これもまた、覚えのある感触。

「……懲りない人ですねぇ。そんなに落下するのがお好きですか」

ひっ、と喉がひきつる。
おそるおそる顔を上げると、私をスプラッタから救った毛皮――白と黒の、遠目で観察するだけなら珍妙で可愛らしいはずのイキモノが、実は近くで見れば獰猛なのよ、な雑食系の歯並びを見せてニヒルに笑っていた。
そう、丸々した見かけと、のんびりした動作でみんな誤解してると思うんだけど、こいつらは草食ではないのだ。雑食。あれば肉だって食べます。どんなに見かけが間抜けで可愛らしくても――クマだもん。
いわゆる、シロクロクマ。ジャイアントパンダ。大熊猫。
動物園の人気者、パンダさんです。
タレ目を装う目の回りの黒斑に誤魔化されているが、実は目付き鋭いの。間近だと怖いんだって！
慌てて身を離そうとするも、ガッチリと腕を掴まれ身動きもままならない。

「兄者、嫁、大丈夫か～」

そうしているうちに、ザシザシと枯れ葉や土を踏みしめてもう一匹がノンキにやってくる。

嫁じゃないっつうの、という文句も出てこないくらい、私は疲労感に襲われていた。どうやら捻ったらしい足首も、熱を持って痛い。

くっそ、また逃げられなかった……。

「テイよ、嫁御は怯えやすい。あのような追い方をすれば追い詰められるのも当然だろう」

「でも、ケイが先に回り込んでたし～」

もたもたと太短い手を振り、兄の注意に弟は言い訳をする。

その頭をペチリと同じく太短い手で打って叱り、兄は腕の中の私を抱え直した。

ああ。見ているだけならほのぼのと身悶えする光景なのに。リラックスしたクマにその人気の座をすっかり取って替わられたけど、たれたヤツも大好きだったもの。

なのに。

ひっそり吐いた溜め息を聞き咎められたらしい。

全く見分けのつかない――嘘。大変遺憾なことに、見分けはつく。兄の方の毛並みがサラサラ真っ直ぐなのに対して、弟は少しフワフワしててくせ毛気味なのだ――二対の目が、申し合わせたように私を見た。

ふるりと私を抱えていたイキモノが身震いする。

フンワリしていた毛皮の感触が、滑らかな衣服とガッシリした腕に変わり、サラリと長い黒髪が胸元に落ちてくる。

もったりした動物から、人間の姿になった青年は、切れ長の黒い瞳を笑ませて、私に囁きかけた。

「セナ。いけないひとですね。この山を下りるには険しい渓谷を渡らねばならないのですよ。貴女のこの頼りなく柔い手足では、無理だと何度も申しておりますのに」

本性を知らねばウットリするような美貌に気遣わしげな色を乗せ、握りこぶしを作っていた私の手を取り、宥めるように口付けてくる。

「全くだ。ああ、足挫いちまったんだな。こんな靴で走るからだぜ？」

反対側から全く同じ顔ながらも、野性的な雰囲気を漂わせた男が私の宙に浮いた足に触れた。

腫れた足首から生じる痛みに眉をしかめた隙に、パンプスを脱がされ――ポイと手の届かない遠くまで投げられる。

「あああああっ！？」

もう片方も。

ちょ、靴！　私の靴！

「ふふ、しばらくは履き物など必要ないでしょう？　移動はこうやって、我々が抱いて行って差し上げますから」

「あんな色気のないのより、もっと嫁に似合うヤツ用意してやるからさ」

両側からの勝手な発言に、私は身を震わせた。

「嫁じゃない！　靴返せ離せこの拉致監禁犯ども――――！！！」

兄に肘鉄をかまし、弟に無事な方の足で膝蹴りを放つ。が、あっさり受け止められて、肩に荷物のように担がれた。

「離せ――――！！」
「まだまだ元気ですね」
「あれだけ昨夜可愛がったのにな？」
「全然足りなかったということですか」
「丈夫な嫁でよかったな、兄者」
「私にもお前にもぴったりな花嫁などおらぬと思っていたが」
「いいもの落ちてきたなー」

下ろせ離せとじたばたしていた私が、不安定な姿勢で暴れ疲れてグッタリしても、兄弟のどこまでも自分達勝手な会話は続く。
再び遠ざかる下界に繋がる道を見つめつつ、私は呟いた。
何でこうなった、と。

追伸、父上様、母上様。
性格のキツさとガサツさが災いして、彼氏いない歴イコール年齢だった私。
何故か現在、動物が人に変わる世界で、俺様双子パンダの激しい求愛を受けております。
どっちの子どもか分からない、ラブリー仔パンダを産む前に、何としてでも日本に帰り着きたいと思います……！

（中）

白のニットワンピース、黒いレギンスというモノクロファッションが悪かったのか。
今になってそう思う。

友人たちと、飲みに行った帰り道、見事な満月に見惚れて――階段を踏み外した私は、何故かぱっくり開いていた穴に転がり落ちた。
まったく、どうしてあんなところに穴があったんだか。責任者出てこい。
穴の中、悲鳴を上げるタイミングを逃してぽかーんと口を開けたまま落ちていると。
ふっと視界が切り替わるように暗闇が途切れ、ボフンと弾力のあるマットレスにも似た感触が私を受け止めたのだった。

「――――ふぎゃっ！！」

グシャッとかゴツンとか、予想していた音ではなかったことを不思議に思った。
存在を激しく主張する心臓と、ひきつった自分の呼吸音に、生きていることを実感して、おそるおそる顔を上げる。
そうして目に飛び込んできたのは――白黒の毛皮。
野っ原に重なるように寝そべっていた、二体のパンダのお腹の上に、どうやら私は落下した模様。
え、パンダ？　何故パンダ？　ヌイグルミが何故、っていうかでかいヌイグルミだなあ。長い間落ちてたわりに、衝撃少なかったけど、これがダメージ吸収してくれたのかしら。
受け止めてくれたもふもふを撫でていると、もがくようにそれが

動いた。

「くすぐったいです」

はッ、喋った……！　着ぐるみ、着ぐるみだったのね！？　どうしよう、思いきり下敷きにしちゃったよ！

「ごっ、ごめんなさい、大丈夫ですか、落下速度と距離と時間を計算すると、内蔵破裂いやあああっ？！！」

中身が潰れてないか確かめるように、手のひらをぶつかった辺りに這わせた。……なんで温かいのかしら。

「積極的なんですね」

中の人声いいなー。

色男声だ。着ぐるみっててこんなだと、直に耳にしたらさぞかし……、

「お前に怪我はないのか」

同じ声が違う口調で頭の後ろから聞こえて、首を捻る。

お腹に私の下半身を乗っけたまま、もう一体のパンダさんが上体を起こしていた。

――その時点で、なんか変だな、とは思っていた。

中に人が入っているにしては、なんと言うか、こう、バランスが。ぐにゃぐにゃと柔らか固くて。月明かりの下じゃよくわからないんだけど、キラリと光った瞳は作り物のようには見えなくて。

起き上がる、毛皮の内の筋肉が波打つのが感じ取れて――にい、と笑ったお口から覗く歯が――あれ、そこは中の人が見えるはずで

は？　もしくは開かないはずでは。

「ふふ、ものの話には聞いていましたが。落人とはなんと可愛らしい」

「それになんかいい匂いするぞ」

いえ、それはさっきまで飲んでいた果実酒の匂いだと。

遠慮なく人の首筋をふんふん嗅いでくる、一匹の鼻面を押し退けようとして、温かい息に触れた。

そこでようやく、ようやく、なんだかとってもおかしい状況にあることを、私は認めたわけですよ。

「あー……あのぅ、ええと……ココハドコデスカ」

でもって、あなた方は何だ。

同じしぐさでパンダたちは顔を見合わせた。

頭上には丸い月。サワサワと葉擦れを起こす竹林。ぽっかり空いた草原に、私とパンダとパンダ。

私が落ちたはずの階段も、ご近所の街路も全く見当たらない。というか、どこから落ちてきたワケ、私。

頭の中は疑問符で一杯、胸に満ちる不安が、白黒の毛皮を撫でる手を震わせた。

その怯えを感じたのか、丁寧な口調の方のパンダが私を包むように抱きしめる。

幼子を宥めるような抱擁に、気恥ずかしさを覚えつつ、背中を叩かれて次第に落ち着いた。「兄者ずるい～」とぼやいた声も、頭を撫でてくれて。

この二人――この二パンダ？　――は、兄弟らしい。

自分より少し大きな温かいイキモノに挟まれて、恐怖を覚えても良さそうなものだったけれど、私は逆に安堵していた。

もう大丈夫、と両パンダを見上げて頷くと、彼らは微笑んだようだった。

「俺はテイ」
「私はケイ」
「佐々原、瀬名です」

月夜にパンダと自己紹介だなんて、愉快すぎる。
まだ酔いが残っていたのかもしれない。その異常さに戸惑いもせず、私は笑顔を向けた。
確かめるように私の名前を繰り返していた二人は、ふるり、と身を震わせる。淡い光が目前に溢れて――瞬きのあと、近くで見るには健康に悪いほどの、美貌がそこにあった。動悸とか息切れめまい的な。
……え？　あれ？　パンダさんたちは？
キョロキョロしても、もふもふパンダさんは見当たらず、腰が引けそうになる美青年が二人――私の手をそれぞれ取って、口付けを落とす。

「――ようこそ、我が地へ」
「我らが花嫁どの――」

……ナンデスカソレ。

落人、と言うそうだ。ある日異世界からこちらへ落ちてくる者のことを。
ここは獣人が支配する世界。獣から人の姿に変わる種族の生きる世界なのだ。

私が落ちたこの辺りは、大熊猫の地。彼らは個人主義で、家族で固まったり群れを作ったりはしないそう。だから、国という形態を持たず、ただ自分たちを『大熊猫の一族』と称している。
しかも、全体的に個数も少なく――他者との交流も極端にないため、幻の種族とも言われているらしい。
私を捕獲、いえ、保護した双子パンダ兄弟は一族の長で、唯一住居を定め、まだ一人立ち出来ない一族の子らの面倒を見ていた。
ようするに、託児所？
連れて帰られた屋敷で、一ヵ所に固まるようにして寝ている子パンダを見たときは、あまりの可愛さに狂喜したのは私です。
異世界だとか、動物が人に変わるとか、もとの世界に帰れないとか、諸々の不安ごとを忘れられたのはよかったんだか悪かったんだか。

今更だけど、落人は大抵の場合、上位種と呼ばれるこちらの権力者に保護され、生活して行く術を会得するそうなのだ。
だから、私もちっちゃい子のお世話をして、それを仕事にするのが妥当ですよね？

――何故、落下当初から『嫁』認定されていたのですか。

こっちは何にもわからないものだから、落人イコール嫁、そういうものかと思って、うっかり流されてしまったじゃないか！

他に職業選択の自由があるなら最初に言っとけええええ！！

（後）

ぼたり、と目の前の小山から丸っこい白黒毛玉が転がり落ちた。
しばらくの間落ちた姿勢で停止。のち、また懲りずにのたのたと山に登ろうとする子パンダの姿に、私は頭を抱えて身悶える。

いやあああああっ！
なにこれなにこのかわゆいイキモノ！！
たまらんっ、どんくささがまたたまらんっ、下の子たちも、どうしてそんな小山になってるの！　重くないのっ、やめてひとかたまりになるのはあああああっ！！
さっき落ちた子がようやくパンダ小山のてっぺん辺りに辿り着いた。と、また違う子がぼとりと落ち。以下、エンドレス。
うあああああ私を悶え殺す気かッッ！！

包帯でグルグル巻きにされた右足を庇い、転がりつつ、ジタバタ暴れるという器用なことをしていた私は、背後から近づく危険に気づかなかった。

「……それくらい私共のことも熱心に見つめてほしいものですね」
「妬けるなぁ」
「ぎゃっ！！」

庭で遊ぶ子パンダたちがよく見えるように、表に面した廊下に寝っ転がっていた私に覆い被さる兄弟。両側から挟み込まれて身動きができなくなった。

「ふふ、ちいさきものらは可愛らしいでしょう？　今でもあのよう

に我らの何分の一ほどの大きさですが、」
「生まれたばっかりのときはこんななんだぜ～」

こんな、と言いながら弟のほうが両手で掬うような形をつくる。
そ、それは手のひらサイズ……！

「まだ毛も生えてなくてな、桃色の地肌が見えてるんだよ」
「徐々に白と黒の毛皮になるんですが」
「目もろくに見えないのにさ、よたよた動こうとするのが、」
「また可愛らしいんですよ。――ご覧になりたくは、ないですか？」

なりたい！　なりたいとも！
兄弟から交互に語られるちいさきもの、つまり子パンダの様子に私はヨダレを垂らさんばかりだ。
手のひらサイズの子パンダ！　おっきくなったらこいつらのようにふてぶてしくなるのだ、可愛いうちをじっくり堪能したい！！

「ふふふ。私も早くこの手に抱きたいものです」
「兄者に似ても俺に似ても男前だろうし、嫁に似てたら、もう外界になんか出したくなくなるだろうなー！」

……はっ……？
マボロシの子パンダを抱っこしているつもりになっていたら、いつの間にか自分が兄に抱っこされていた。横座りに投げ出された足を、弟が撫でてくる。怪我を心配するようなものではなく、ねちっこい意図をもって――罠！　罠かっ！！
まだ昼間ですよ！
そこに子パンダたちがいるのですよ！　やめんかっ、この色情パンダども！
私と双子の間で密かに展開される、めくるめく年齢制限への攻防。

誰かたーすーけーろおおおぉー！　という私の叫びを聞き届けたのかどうか、

「よめさま～、これあげる～」

「よめさま～」

ワサワサと音を立てながら、竹を持った子パンダたちがやってくる。

舌っ足らずに、よめさまよめさまと私を呼ぶ子らに、嫁じゃなーい！　と反論したいけど、できない。かわゆすぎて……！

彼らの長である双子が、私を嫁、嫁と呼ぶものだから、みんな真似するのよ。

「嫁じゃないのよー？」と教え諭しても、「うん、セナっておなまえだよね、よめさま～！」純真そのものの瞳で言われました。

……。

もうちょっとこの子たちの分別がついたら、キッチリ訂正しよう。

「おけが、したでしょう～？　たくさんたべて、なおしてね～」

「いっぱいね～」

「あらー、いいの？　みんなのご馳走分けてもらってもー」

「いいの～」

「よめさまだから～」

のたのたとやってきては、私の前に彼らの主食である竹を置いていく。山盛りになった竹を前に幸せな笑みを浮かべつつ、礼を言う私。子パンダたちはみぃみぃと猫に似た笑い声を立てて、コロコロ転がるように移動し、また小山になった。

くそう、足さえ動けばあの小山にダイブして一緒にゴロンゴロンしてやるのに……！

ありがとうありがとう、すごく嬉しいの、でもね、よめさま、

竹は食べられないんだ……！！
どうしようこれ。

「中に穀物を積めて蒸し焼きにしましょうか」
「ちょうど嫁のために物資が届いたからな。ご馳走作ってやるぜ」

子どもたちの監督者として、真っ昼間から不埒な行為に走るのは諦めたらしい。双子は私に送られた竹を持ち上げて、そう提案してくれる。
クッションや敷物に私を埋もれさせて、足の包帯を巻き直す。至れり尽くせり、というか。
こういうところはなんの不満もないのよ。
パンダだけど美形だし。
パンダだけどいい男だし。
パンダだけど気は利くし。
パンダだけど――パンダのときはもふもふしがいがあって、ちっちゃい子たちと戯れるのとはまた違う萌えがある。どーんとぶつかっても大丈夫な安定感とか。
――ただ。

「嫁には体力つけてもらわねーとな！」
「ふふ。嫁御に似合いそうな綺麗な着物も用意したんですよ。あとで着て見せてくださいね」
頭をクシャクシャして、スルリと顎を撫でていく指先が、別の意味を持っていなければ。
「嫁言うな！」
もう何回目かになる否定を繰り返す。

しかも、なんで二人いっぺんの嫁なんだ……！
人の話をちっとも聞かず、仲良く台所へ向かう二人を睨んでいると、「よめさま～」と庭から子パンダたちが短い手足を振ってくる。そのかわゆさにヘラリと笑って手を振り返し――

前略、父上様、母上様。
このまま双子パンダと子パンダたちに囲まれ生活するうちに、なし崩しにほだされてしまいそうな自分がいて、少し怖い瀬名なのです……。

（後）（後書き）

ほだされちゃえ。
あともう少々オマケがあります～。

だそくのいち（前書き）

※逃亡瀬名捕獲、お家に帰った直後。

だそくのいち

「まったく……あまり心配させないで下さいね」
「捻挫ですんで良かったな」

身動きしないようにケイが私を背後から抱き抱え、テイが足の手当てをする。ひんやりするペースト状の薬を腫れた部分に塗られて、油紙のようなもので包まれ、最後に包帯を巻かれて。
そもそも私が怪我をするはめになったのは、とか、逃げたくなったのは誰のせいだ、とか物申したい気分ではあったんだけど。
屋敷に戻ったとたん、湯殿に連れ込まれて、逃亡中の汗やら泥やらかすり傷を清められて、余計なことまでされた私はぐったりしていたのです。
労(いたわ)るのか苛(さいな)むのかどっちかにして頂きたい。だんだんこいつらの行動パターンに慣れてきた自分が嫌だ。

「だいたい、この山を降りてどちらへ行くつもりだったんです？人里など有ろうはずがないというのに」
「嫁が俺たちのいるところに落ちたっていうのも稀有なことだったのにさぁ」

真面目な顔で諭してくる双子を私は白々しい思いで眺めた。
ええ、こっちが何もわからないと思って、都合のよいことを並べ立てて下さいましたよね。
大熊猫以外に住獣(じゅうにん)はいないとか、落人はこちらの代表者の嫁になるとか、いろいろと……！

「開けた場所に行けば、私が探さなくても見つけて貰えるんじゃな

いの？　そこら辺飛んでる鳥族とか走ってる馬族とかに。たまに竜族もいらっしゃるそうじゃない？　それぞれに保護されてるお仲間が、就職先は口聞いてくれるだろうし」

ぴたり、と双子が動きを止めた。私を間にアイコンタクトを交わす。

―お前、まさか情報を洩らしたのではなかろうな？
―言うわけないじゃん！　そこんとこの意見は兄者と一緒なんだし！
―では何故、セナが事情を、
―兄者こそ、うっかり独り言とか言ったんじゃないの？
―お前ではあるまいし……

醜い兄弟ゲンカが始まる前に、私はネタをバラした。

「……“よめさま、どこからきたの～？”“とりさんのとこの、おちゅーどさん、しってる～？”“うささんは～？”“あにきは～？”“うまさんとこもいるって～”“ほかにもね～、”……他にもいるそうじゃない、私の世界から来た人たちが。っていうか、あんたたちが引きこもりなだけで他国とやり取りしてるんじゃないの！」

爆発した私は背後の兄に頭突きをかまし、弟に動く方の足裏を叩きつけた。

「情報源はちび共か……」
「しまった、外界教育が行き届きすぎたか……」
「この嘘つきどもーーー！！」

手近にあったクッションを掴んでぶん投げる。
見知らぬ世界で居場所もなく、帰る方法もわからず途方にくれて

怯えていた私。
それを二人とも慰めてくれて、優しくしてくれて、『え、二人のお嫁さんってちょっとヤバくない？　でも大事にするって言うしー、帰れないしー、何処にも行くところないしー、ちび可愛いしー、仕方ないかなー』とか既にほだされかけていた自分を殴りたい。
代わりにパンダ野郎共を殴った。たいしてダメージ受けてないのがまた腹立たしい。

「嫁、落ち着け」
「嫁言うな！」
「しぃっ、セナ、ちいさきものたちが起きてしまいますよ」
「アンタ、ちびちゃんたち持ち出したら私が黙ると思って――」

声ひそめちゃったけど。

「……詳しく説明しなかったのは謝ります」
「でも、俺もケイも嫁……セナに何処にも行ってほしくなかったんだよ」

両側から、手を握られる。なによなにより、そんな殊勝そうな顔しても騙されないんだからっ。

「……勝手に嫁とか決めるしっ」
「だって一目惚れだったんだもん」
「心細げに、この腕の中で震えていらした貴女を、我々が守って差し上げたかったんです」

……そんなこと言って、この辺りに独り身の女が居なかったから、都合が良かっただけのくせに。
私の反応がおもしろいから、手離さないだけのくせに。

「どうすれば我々の想いを信じて頂けますか」
「ホントに、お前のこと大事にするし、一生苦労させないから」

何処にも行かないで――
大の男が二人して、情けない顔ですがりつくような視線を向けてくる。なんだか自分がものすごい悪女になったような気分だ。
しかし、こちらに来て双子パンダに振り回され続けた私は知っている。
これが奴らの作戦だと……！
ちょっと好みの外見だからって、人がホイホイ言うこと聞くと思ったら大間違いなんだから！

「セナ」
「セナぁ」

お、大間違いなんだからーっ！

「ぱんだ！　パンダにおなり！」

美形二匹ににじり寄られ、追いつめられた私はビシリと指を突きつけた。不思議そうにしながらも、獣形に戻る兄弟。

「セナ？」
「これでいいの？」

ででんと丸い身体、のんびりした雰囲気のパンダが、きょとんと首を傾げてこちらを窺う。相変わらずギャップすごいな。
動悸息切れめまいなものがなくなったところで、私は体当たりして双子を倒した。ゴロン、と素直に転がったケイとテイの間に挟ま

って寝そべる。

「アンタたちは今日布団の刑！　いらんことしたり動いたら天日干す！」

「意味がわかりません、セナ」

「生殺し刑……？」

ぶつぶつ言っている二人を無視して、私はぬくぬくふかふかに包まれて目を閉じた。

この安心感を手離すことが出来ないのは、私の方だと気付きつつ――これからも、知らんぷりを貫くのだ。

だそくのに

嫁には、ここは峡谷に隔たれているため外部との接触が出来ない、と、説明していたが、実のところそうではなかったりする。
天高く伸びた竹林が邪魔をして多少面倒なのだが、空を行く鳥族や竜族が来ないわけではないし、年に一度くらいは一族のものだって顔を見せる。

そして――

離れの堂に運びこまれた荷をひとつずつ確認し、質も調べたのちに俺は兄者に向かって頷いた。それを待っていたように、商人が言葉を発する。

「頼まれていた品は以上で間違いございませんか」
「確かに」

書類に印を押し、本日の取引はこれで終わり。
外界を隔絶して生活している我らだが、こうしてときどき商人を呼び、物品のやり取りを交わしていた。
商人は本来人材派遣のようなことをしているらしいのだが、うちは人手の代わりに商品を都合してもらっている。彼は根っからの守銭奴……もとい、商売人で、金になればそれで良いという立ち位置を貫いているため、取引の他は必要以上にこちらに関わろうとしない。
なので兄者も俺もある意味安心して、ここへの直接の出入りを許しているのだ。
荷を移動させようと持ち上げた後ろで、兄者と商人の世間話が続

いていた。

「……しかし、今回はずいぶん毛色の違う品ばかりのお求めでしたね。花の香りの石鹸、白の絹、大熊猫どのが普段は召し上がらない食材の数々――どなたかお客人でも？」

落人が来たことをうすうす感づいているだろうに、あえて遠回しに尋ねてこちらの反応を窺う商人。相変わらずなんというか、営業用の笑みが黒い野郎だ。白ウサギのくせに。

だが、黒さならうちの兄者だって負けてはいないのだ！　それに関しては嫁の保障付きだからな！

「ああ。客ではないがな。客人と言えば――そちらの落人、ユーナどのと仰ったか？　いかがお過ごしだ。よろしければこちらにも遊びにいらして下さいと伝えてくれ」

「アレは客などではありませんので。遊ばせている暇など無いのですよ。お言葉だけ、有難く頂戴しておきます」

兄者の、そっちがそうならこっちだって、という意図で持ち出された兎族にいる落人の娘の話題は、予想通り間髪入れずの拒否にあう。にこやかに交わされる言葉の間に漂う、ドス黒い空気。嫁がここにいれば、「陰険大合戦ッ！」と慄いて叫びそうだ。今頃他人の立ち入れられない中庭で、ちいさきものらと“ゴロンゴロン”している嫁を思い、遠い目になる。早く俺もゴロンゴロンしたい。

嫁はちっちゃくて折れそうなほど手足も身体も細いのに、とても丈夫で元気だ。兄者と俺がいっぺんに可愛がっても壊れない。賑やかに怒鳴りつけて暴れる様子がまた可愛らしいのだ。身体は柔らかで甘い。つい肉食に戻りそうになる。

今はまだ、兄者と俺、二人の嫁だということに戸惑っているよう

だが、そのうち落ち着くだろう。なんたって、二人分愛情注いでいるからな！　相乗効果で四倍なんだ！

どうやら嫁は俺達二人に同等の思いを持っているようだし。これが、どちらか一方だけに偏るようなら、たぶんうまくはいかないんだ。今まで一族の女とはそれで長続きしなかった。

兄者と俺は、二人で一人だから。

別々のものだと認識しつつ、ひとつの存在だと理解している嫁は、本当に貴重なんだ。

落ちてきたとき、見知らぬ場所で心細そうにしていた彼女のためには、他所の落人仲間と会わせてやった方がいいんだろう。だが、独占欲の強い俺たちは、たとえ同郷の者だとしても――いや、同郷だからこそ、会わせたくないと思っている。

彼女の視界に映るのは、俺たちだけでいい。

彼女が思いを返すのは、俺たちだけでいい。

本当なら、室（へや）の奥深く隠して、俺たちだけのものにしたいんだ――

そんな昏迷した考えを読んだわけではなかろうが、商人が独り言のように呟いた。

「あまり縛り付けると逃げられますよ。彼女たちは、思いがけない行動をとるときが多々ありますから」

「……経験論か？　白兎の」

悟ったような彼の忠告に、兄者は含みのある笑みを浮かべた。

――白兎は先日、保護していた落人に厳しくしすぎて家出されたらしい。彼なりの可愛がり方は娘には通じなかったようだ。

おしゃべり雀が聞きもしないのに噂話を撒いていくので、それな

りに情報は手に入っていたりする。
兄者の揶揄に、刹那、営業用の仮面が剥がれ真顔になったが、流石と言うべきか。彼はすぐに見慣れた作り笑顔で、暇乞いを告げた。
「では、またのご利用をお待ちしております」
一礼して、ジャラリと鍵を鳴らし、どこにも繋がっていないはずの扉を開ける。壁に一歩踏み出し――溶けるように姿を消した。
あーあ、可哀想に。帰宅した商人の八つ当たりを、訳もわからず受けるだろう落人の娘に、憐憫を覚えた。ガンバレ。何ならうちで引き取ってやってもいい。嫁には出来ないが。
「珍しく口数が多かったな。……それとも、誰かに依頼を受けたか」
「嫁の情報を売るつもりか。　帰さねえ方が良かったか」
眉をひそめた兄者の言葉に、すでに閉ざされた扉を睨んだ。
「いや、いずれ知られることだ。あちらの弱みもわかったし、しばらくは静観と行こう」
嫁を奪おうとする輩が来るならば、蹴散らせばいい。謀は頭のいい兄者に任せて、俺は嫁を喜ばせることだけを考えよう。さしあたっては今夜の飯か。何がいいか聞いてみるか。新鮮な食材も入ったから、大抵の要求には応えられる。
嫁、嫁～と呼び掛けながら堂を出る。兄者は石鹸のひとつを手にし、香りを調べていた。日常的に女が使う細々としたものも購入したから、きっと喜ぶ。
「これならそんなにキツクもないし、自然な香りだから、ちいさきものらも嫌わないだろう。セナも気に入ればいいが」

「ケショースイ！　ホシツがああ！　とか叫んでたからな。早く持って行ってやろうぜ兄者」

むう、と照れ隠しにふくれた顔をして、だけど、最後ははにかんで微笑み、礼を言う嫁を想像して、兄者も俺も幸せな気分になる。

落人が何故、何処からこの世界に来るのか、我らには解らないが。彼女に関してだけは、分かるような気がする。

それはきっと、兄者と俺のためなんだ――――

（　兎の忠告という不吉な予言が的中するまで、あと少し。　）

だそくのに（後書き）

「よめさまどこ～」
「かくれんぼなの～？」
「おひるね、してる～？」
「よめさま～」

逃亡した瀬名をもたもたと探しているちいさきものらに愕然。
（前）に続く……。

※兎世界の方に特別（無断）出演して頂きました。
こんなの○○さんじゃないわ！　と思われましたら深月の筆力不足ｏｒｚ
汐井様、失礼致しました！

だそくのもふ。

ここへ落ちてきた当初。
起こったことは仕方がない、そう思って明るく振る舞いながらも、この世界で、ひとりぼっちの存在であることを、とても不安に感じていた。

「あっ、よめさまだ～」
「よめさま～～」
「よ～め～さ～ま～！」

コロコロした丸い生き物たちが、こちらへ手を振ってきた。
彼らを眺めていると、自然ゆるんでしまう唇に笑みを浮かべて、私は手を振り返す。と、更に手をバタバタさせた子の手が隣の子にぶつかり、よろけた子がまた隣の子にぶつかり――ケンカのようなじゃれあいが始まってしまう。
もたもたごろりと白黒丸いイキモノが団子になって戯れる光景に、私は回廊の柱をベシベシ叩いて悶えた。
かわゆい。可愛すぎる……！

――しかし。
いくらどんくさ可愛げな見かけでも、コレらは意外と油断ならないイキモノなのだ――。

めきっ、
めりっ！

ペキ、メシッ、ミシッ。
めりり、めりっ。

固いものが背後で折られる音に、私は笑顔をひきつらせてすぐ脇に視線をやる。
そこでは、庭の子どもたちより数倍はデカイ二匹の大熊猫が、竹をまるでサキイカのように裂いて千切り取り、咀嚼していた。器用に物を掴むその手と、実は鋭い牙を使って。
いや、デカくてもパンダ、もったりパンダ、だらしなくさらけだしたお腹に葉っぱ散らしちゃって、和むお食事風景なのですよ。こんな至近距離で見るのでなければ……！
道具を使わなければへし折るのも辛そうな竹の節を、あぐっと噛んでベリベリと剥く。
また、細い枝茎はグリッシーニのようにポリポリとかじられ、あっという間にその口の中に消えていく。
恐いもの見たさというか、つい目が離せなくなって、じぃぃ、と成獣（おとな）二人の食事風景を注視していると、「セナ？」こくりと兄が首を傾げた。
ちょ……！　兄のくせに可愛いとはどういうこと！？

「欲しいのか～？」

持っていた竹の葉を軽く振りつつ、弟が訊いてくる。

「要らんわ」

ケンもホロロに拒否すると、こころなしかションボリした様子で、葉っぱをかじりながらこちらを上目遣いでチラ、チラッと見てきて。
――なんだそれは狙ってるのか狙ってるんだな！？　弟のくせにいぃぃ！！

中身が変態俺様双子だとわかっているのに、それぞれの仕草にやられてしまった私はまたもや柱をバシバシ。
そんな私に、獣形になると何故かいつもぴったりべったりひっついているブラコン双子パンダは、そろって同じ方向に首を傾げた。

モ　エ　殺　す　気　か　。

大も小もまとめてパンダに弱い自覚がある私は、誘惑に負けて抱きついたりしないように、拳に力を入れ直す。
くそう、もふもふしたい……！
だがしかし、私だって学習しているのだ！　この二人にウッカリもふもふすれば、直後、全年齢エリアでは言えない目に遭っちゃうなんてこと。
有り余りまくったリビドーはあとでちびちゃんたちに癒してもらおう……。
本能のままに行動しないように、柱に懐いて堪えていると、本能に逆らわない代表兄弟が、両側から私の顔を覗き込んできて。
そのつぶらな瞳に一瞬怯んだ。

「セナ」
「セ〜ナ」

抱きつくならこっちでしょう？　柱にしがみついた腕を解かれ、右から左から逆もふされてしまう。逃げる間もない。
せっかく堪えていたのに、こうしてもこふわ毛皮にサンドされてしまうと――――もうダメだ。
どうせ押しに弱いよ！

「うううう……もふもふーーー！！」

あっさり陥落してしまった私は開き直って、胸だかお腹だかハッキリしない部位に頭突きする。笑い声を上げる二匹に、渾身の力で抱きついた。
ぎゅうぎゅうぎゅう。できれば私の精神安定のためにずっとぱんだでいてくれ、ぱんだで！！
そんな願いも空しく、二人は私の腰に背中に腕を回し、ガッカリな人形に……。
と、そのとき。

「わ～い～」
「なかよし、する～」
「もふ？　もふ、よめさま～？」
「おささまたかいたかいして～」
「ゴロンゴロンして～」
「ぼくも～」

みゃあみゃあと騒ぎながら、子パンダたちが駆けてきて、ぶつかるように抱きついてきた。遊んでいるとでも思ったのか。
ふいうちによろめいた私を支えようとした双子に、更なる子パンダの足元攻撃。
当然、バランスを崩した私たちはその場に倒れこむ。

「ぎゃっ」「きゃあ～」「重ッ」

続けて、重なって倒れた私たちの上によじ登り乗っかってくるちびたちに、もみくちゃにされて。
こら、と怒るつもりだった私は、やわらかくあたたかいイキモノに包まれている感触に、どうしてか幸せな気分になって笑い出してしまった。手の届く範囲の子たち全部を抱きしめる。

「よめさま、ぎゅう〜」
「ぼくもぎゅうして〜」

きゃっきゃとねだられるまま、片っ端からもふもふしてやった。
一番下になっていた双子は、下敷きになったまま人形に変わり、眉を下げて顔を見合わせ――仕方ないなとでも言うように笑んで、子パンダを抱えたままの私を肩に担ぎ上げた。
どんな力持ちよ、と突っ込む隙もなく立ち上がって。
高くなった視界にきゃああ、とちびたちが喜びの悲鳴を響かせた。

いつか落ちてきた空を仰ぐ。
私の世界への帰り道は見えないけれど。
賑やかな日常が私をほうっておかないから、ひとりぼっちだなんて、もう思わない――。

だそくのもふ。（後書き）

終。

とりあえずここで完結を押しておきます。
ネタが浮かべばこっそり足すかも～。
お付き合いありがとうございました！

羊さんからお年賀ついた（前書き）

羊の世界にとりっぷ！
さくらさくらさくら様に捧ぐ。

羊さんからお年賀ついた

拝啓

地球世界のお父様、お母様。
遅ればせながら、あけましておめでとうございます。

こちらで迎えた新年は、子パンダちゃんたちのモフモフ団子に挟まれて、のんびりまったりな寝正月と相成りました。
……他にすることもないので。

紅白も除夜の鐘もないお正月。
そもそも大熊猫の国の新年は時期が違うのですが。お母様のお正月料理が食べられなくて、密かにしょんぼりしていた私に、双子パンダが無駄なマメマメしさをもって五段重箱に渡る御節やお雑煮を作ってくれました。
我が家のものとはやっぱり違うけれど、何も言わないのに私の気持ちを汲んで作ってくれたことがちょっぴり嬉しかったりとか来年はうちの味を私が作って教えてあげようかなとか、……ハッ！？　いえいえ、ほだされてなんかいませんよ！　いませんってば！

コホン。
こうして瀬名は元気にやっておりますので、どうかお父様もお母様もあまり心配なさらず、お元気でお過ごしください。
大熊猫の国から娘瀬名が、お二人の今年一年の御多幸をお祈りいたします。

「嫁、嫁〜」
「……セナ」

日当たりのいい中庭で、ゴロゴロしている子パンダたちのオナカを手当たり次第に撫でくりまわしていると、妙な迫力を漂わせた双子がやって来た。

「……なに」

満面の笑みが気色悪い弟と、不吉な予感しか感じない麗しの笑みを浮かべた兄を胡乱げに見やる。

「先ほど羊の国からこの様な物が届きましてね？」
「あそこの落人のお嬢ちゃんが、セナにどうぞって作ってくれたらしいぞ」

代わる代わる説明しながら、手にした白いふわふわもこもこを私に差し出してくる。

なんと！
羊の国からということは、正に１００パーセント羊毛！？　マフラーかしら、一抱えってことはケープとか膝掛けとか……！

「うわあ、お礼言わなきゃ。ええと、ええと、羊さんとこの娘さんって、たしか……めりーちゃん？」
「めえだよ」
「メイさんですよ」
「お礼状書かなきゃ！　それくらいは届けてくれるでしょ？」

そうですね、セナがこんなに喜んだことをお教えしなければ、と珍しく兄が同意して。

私自身が外に行ったり他人と交流することを許してくれなかった心の狭い双子は、最近やっと他の国のことも教えてくれるようになった。

物資なんかをやり取りしているお店の人とか、何度かここに来ているらしいのに、ちっとも会わせてくれないけど。

他の落人さんたちが現在どうしてるとか、ときどき話してくれる。

こうして贈り物を渡してくれるってことは、排他的態度、軟化してるよね？　そのうち皆様と会ったりできるかも、と密かに期待しつつ、わくわくと荷物を受け取る。

・・・・・・。

無言になった私に、双子がしたり顔で頷く。

「兎年なので、落人はこの格好をするしきたりなのです」

「セナが着たところ是非見たいって言ってたんだが、溺愛一直線がうちには来させられねえって言い張ったらしくてよ」

「ですから、私たちが堪能……いえ、ちゃんとセナが着用したことを確認して報告して差し上げようと」

「うさぴょん～」

「よめさま、うさ～？」

「ぱんだ、ならないの～？」

「うさなの～？」

子パンダちゃんたち、ちょっとお黙りなさい。

私は頭上から降ってくる邪な二対の視線を必死で黙殺し、羊の国のめえちゃんからの贈り物をじっとり眺めた。

ふわふわの白い帽子にピョコリとついた二つの耳。
この季節じゃなくても個人的にへそ出しはキツいと思うの主にぷよ肉が、なモコモコ上衣。
冷えの味方、毛糸のショートパンツに芸の細かいボンボン尻尾。
更にぬくぬくレッグウォーマーも付いて、なんて見事にキュートな、

……ウサギさんコスチューム……！

「ふふ、きっとよく似合いますよ。今度は是非パンダを」
「ん？　ここで着替えるのは恥ずかしいってんなら、奥に行くか？」

故郷を同じくする少女の力作に、私のＨＰがザックリ削られる。
こんなラブリーかつキュートなアイテムを身に付けた日にゃー、誰とは言わないけどどこかの俺様変態双子パンダに捕食されること間違いなしなのですが……！　というか今現在めちゃくちゃ不穏な眼差しが！

こないな恐ろしげなもの見なかったふりしちゃいたい。

だがしかし。

編み物の素養がなくてもわかる、丁寧に編まれたその一目一目に籠められた、作成者の純粋な好意が、それを私に許さない。
ヤツらさえいなければ、“うわ～い、かわゆい！　あったかそう

～（はぁと）”なんて照れつつも嬉々として着用したのに！

なに？　新年早々なにを試されているの、私……！

「……さあ、セナ？」

「嫁が着てくれないと、お嬢ちゃんガッカリするぜぇ？」

「よめさまうさうさ～」

「もふもふおそろい～」

ロクでもない熱意を持って双子が。

キャッキャとはしゃいで無垢な子パンダたちが。

期待に満ち満ちた瞳を、私に向けてくる。

どうする。

どうするよ私！！

まだ会ったこともないのに、無邪気な少女が、えへっと私に笑いかける幻が見える。

着るべきか

着ざるべきか。

ウサギ耳帽子を握りしめ、私は究極の選択を迫られた――

その後のことは、皆様のご想像にお任せ致します……。

羊さんからお年賀ついた（後書き）

Happy New Year!

May this year be happy and fruitful.

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8291o/

大熊猫の世界にとりっぷ！

2011年1月14日02時13分発行